

ホータン出土・梵文法華經写本 —ホータンの篤信一家からの贈り物

オスカル・フォン・ヒニューバー
水船教義・小槻晴明 訳

この写本の正確な発見場所は不明であるが、19世紀の最後の10年間に、盗掘者たちによってホータン近郊で発見され、ヨーロッパ各国の収集家たちに、切り売りされてしまったことは確かである¹⁾。写本の圧倒的多くの部分は、2つの包みでサンクトペテルブルクのアジア博物館（Азиатский Музей）に届けられ、収蔵された。後にロシア科学アカデミー東洋古文書研究所（Институт Восточных Рукописей Российской Академии Наук）の管理するところとなり、今日に至っている。最初に届けられた包みは、合計396葉²⁾、ニコライ・フョードロヴィチ・ペトロフスキー（1837-1908）が入手したものである。彼は1882年6月1日（発令日）から1903年8月まで在カシュガルのロシア領事を務めた人物である³⁾。こうした経緯から、ロナルド・エリック・エメリック（1937-2001）が、その奥書に注目するまでの長い間、この写本は「カシュガル写本」という名称で知られてきたのである。奥書はホータン語で書かれているので、むしろホータン由来のものであることを示している（以下を参照のこと）⁴⁾。写本の入手時期は、おそらく湯山明の貴重な目録によってであろう、1903年⁵⁾としているのを時折見かけるが、正確には1893年——これよりさかのぼる証拠がないとすれば——である。と言うのは、すでに『ロシア考古学会東洋部紀要』*Zapiski Vostočnogo Otdelenija Rossijskogo Archeologičeskogo Obščestva*（Записки Восточного Отделения Российского Археологического Общества）“Memoirs of the Oriental Department of the Russian Archaeological Society” 1893年7号（pp. 81 foll.）に、この写本に関する覚書が掲載されているからである。セルгей・F・オルデンブルク：「N・F・ペトロフスキーのカシュガル写本」*Sergej F. Ol'denburg: Kašgarskaja rukopis' N. F. Petrovskogo*（Кашгарская рукопись Н. Ф. Петровского）⁶⁾。

次に届いた包みは、別の梵文法華經写本の包みで、1890年から1918年まで在カシュガル領事を務めたジョージ・マカートニー(1867-1945)が、1910年にサンクトペテルブルクのアジア博物館に寄贈したものである⁷⁾。この包みに写本が何葉入っていたかは不明である。この他に、大英図書館がホータン写本をスタイン・コレクションとして40葉、ヘルンレ・コレクションとして4葉保有している⁸⁾。そして、同じ写本に属する若干の葉が各地の図書館に散在している。トリンクラー・コレクションの9葉が、ベルリンのプロイセン文化財団国立図書館に所蔵されている。これらは「マールブルク断簡」である。ハインツ・ベッヒェルト(1932-2005)によって入念に研究された⁹⁾。大谷コレクションの7葉の断簡は、現在旅順(かつてのポルトアルトゥール)博物館に所蔵されている¹⁰⁾。エルズワース・ハンチントンの論文集にある1断簡は、現在ニューヘイブンのイェール大学スターリング記念図書館に所蔵されている¹¹⁾。

これらすべての葉が1つの写本から散逸したものであるのかどうか、当初は分からなかった¹²⁾。まず、ハインリヒ・リューダース(1869-1943)が、ヘルンレ・コレクションの4葉を精査した。リューダースがその作業を行っている間に¹³⁾、南條文雄(1849-1927)とヘンドリク・ケルン(1833-1917)による梵文法華經の校訂本が1908年から1912年の間に出版された¹⁴⁾。H・ケルンが「カシュガル(ホータン)写本」を活用できたのは、B・南條がすでに準備し終えていたテキストの本体が完成した後のことであった。H・ケルンは、極めて一貫性の欠如した手法で、それを校訂したのである¹⁵⁾。その後、より多くの資料が使用可能となるにつれ、散在するこれらすべての葉が、同一の写本に属するものであることが徐々に明らかになっていった。

カシュガル(ホータン)写本のローマ字転写版とも言うべき、初の完全な出版本は、戸田宏文(1936-2003)によって完成された。1977年から1979年にかけて7分冊で公刊され、それらの改訂版が[1冊本として]1981年に出版された¹⁶⁾。2000年に[中央アジア系写本を俯瞰した]最も有益で最新の研究報告がクラウド・ヴィレによって提供された¹⁷⁾。もっとも、カシュガル(ホータン)写本は、ホータン近郊で発見された、かなりの数の梵文法華經写本の1つであるにすぎない。それ以外の多くの写本の由来については、入手した人物が記録を残していないので、はっきりしないか、全く不明である。またよくあることとして、写本を提供した盗掘者たちが、それをどこで手に入れたかを教えたが

らなかったから不明なのであろう。以下に記す少なくとも 14 の写本と断簡はホータン地域で書写された可能性がある。

1. 旅順写本 A (大谷コレクション) (可能性あり)
2. 旅順写本 B (大谷コレクション) (可能性あり)¹⁸⁾
3. カードリク写本 クラウス・ヴィレ編著 2000
4. ファルハード=ベグ写本 戸田宏文編著『中央アジア出土・梵文法華フ』 pp. 229-258
5. カシュガル (ホータン) 写本 戸田宏文編著『中央アジア出土・梵文法華経』 pp. 3-225
6. 2つの写本 (あるいはそれ以上?) の断簡 戸田宏文編著『中央アジア出土・梵文法華経』 pp. 271-320
7. サンクトペテルブルクのコレクションの7写本の断簡 (I. SI P10 & P12 + 13; II. SI P 11[1] & P 7; III. SI P 8; IV. SI P 9; V. SI P 11; VI. SI P 90a & 90b₁; VII. SI L 1)¹⁹⁾

旅順写本は群を抜いて古い写本であるが、蔣忠新 (1942-2002) の指摘のごとく (p. 18a) [旅順写本 A は] 5 世紀中頃までさかのぼる。古書体学の視点からすると、もう少し古いものかも知れない。[旅順] 写本 B は、蔣忠新によれば (p. 18a)、6 世紀の書写の可能性がある。その他の写本は、ギルギット写本でさえ、これらよりも新しく、ネパール系写本はさらにもっと新しい。

言語学上の用法の違いは、写本の [書写] 年代の違いを反映しているだけでなく、テキストの伝承に中央アジア系とギルギット=ネパール系の2つの系統があることを示している。H・ベッヒェルトの指摘するところによれば、中央アジア系のテキストが、[ギルギット=ネパール系] より古い伝承であるというだけでなく、[中央アジア系のテキストは] さらに2つの支流に分岐しており、このことは「提婆達多品」の有無によって識別できる²⁰⁾。

H・リューダースがカシュガル (ホータン) 写本のわずか4葉を精査しただけで気付いたように、中央アジア系のテキストは、大いに言語学的興味を起こさせる。というのは、中央アジア系テキストには、かなりのプラークリット語形が見られるからである。このことから彼は、梵文法華経が元々は中期インド

語で書かれていたのではないかと考えるようになった。H・リューダースが特に指摘したのは、中期インド語の1つであるマガダ語に特徴的な呼格 *kulaputrāho* (folio 260b4) が見られることである。そして、この語形はこの中期インド語 [であるマガダ語] にしか見られない²¹⁾。時は移り、リューダースの仮説は、S・辛嶋の旅順写本の言語についての研究によって確証された²²⁾。

カシュガル(ホータン)写本には、ギルギット=ネパール系諸写本よりさらに古い、中期インド語テキスト [の読み] が多く保存されているが、その書写の時期は、11世紀の書写である最古のネパール系写本とそれほど差がないと考えられる²³⁾。カシュガル(ホータン)写本には書写年が記されておらず、またその文字は一定期間変わらなかった書体で書かれている。このことから、ニコライ・ディミトリエヴィチ・ミローノフ(1880-1936)のような初期の研究者は、これを7世紀の書写と考えたのである²⁴⁾。しかし、サンスクリット語でなく後期ホータン語で書かれた奥書(複数)から判断すると、この写本を9世紀以前のものとするのは、ほぼ不可能である。R・E・エメリックが言語学的考察に基づいて指摘したように10世紀が妥当だと思われる²⁵⁾。

これらの奥書は、カシュガル(ホータン)写本の書写年代の決定という問題をはるかに越えた、少なからぬ関心を引き起こす。これらの奥書の研究を行ったのは、R・E・エメリックとハロルド・ウォルター・ベイリー(1899-1996)である。H・W・ベイリーは、ロケッシュ・チャンドラが出版した初のファクシミリ(写真)版に、写本の最後に記された奥書をローマ字に転写し、英訳を付け、提供している²⁶⁾。残念なことに、この最後の葉は、右部分だけを残して破損している。破損を免れた部分に第28章「囑累品」に続く奥書の約半分のテキストが保存されている (folio 459b1-9)。

] 800: || ttū namo saddharmapu[

]meri jsa haṃbrīhyā u pyarāna cu parilo tsuāṃdā u kṣāḍai jala/2/[puñina jsa haṃbrīhyā u ... jsa haṃbrīhyā u tti ru] puña pharṣaja+(na) haṃbrīhyā u jaraukulina cu pari/3/[lo tsue u ...] jsa u tti ru puña hīvī brātarā braṃgalaina cu parilo tsue u ha[m̄]/4/[...] u tti ru puña haṃtsa hvārakā saṃduṣṭi jsa haṃbrīhyā cu pa/5/[rilo tsue ...] haṃbrīhyā u dvīrā jalottamā jsa u dvīrā śikṣamāñā cu parilo /6/ [tsue ...] budasamgāna u haṃtsa vinayā jsa u <haṃ>tsa pūrā nerā jalārrjunāmñā jsa /7/ [...

*brā](ta)rā dattakāna u haṃṣa brātarā vikraṃṇa u hvārakā dhaṃrmakā jsa u hvā/8/
[rakā ... u tti ru puṇa biśyau hayū]nyau jsa u biśyau busvāryau jsa haṃbrīhyā u
biśyau ysanyau jsa.*

上記奥書の読みは、H・W・ベイリーとH・戸田によった。ただし、[筆記体で書かれた部分の] 1行目の末尾を両者とも *dala* [と読んでいるが、明らかに *jala* [である²⁷⁾。

奥書の現存部分の正書体で書かれた部分は、H・戸田が「800」と読んだ数字で始まるが、彼は、なぜこう読むか、その理由を述べていない。桁の多い数字の解読が容易でないのは、写本にこのような桁の多い数字が現れることは、ほとんど無いし、また500以上の丁数に達する写本は、まれにしか存在しないからである。例外を1つ挙げると、ギルギット出土の根本説一切有部律(Mūlasarvāstivādinaya)に500に至る数字が見いだされる²⁸⁾。この場合、「200」とか「300」などの「100の桁の」数字は、さまざまな書体の“a”に相当する文字(akṣara)で「100」を表し、そこに「2」、「3」などの数字を合成して作成したことは明らかである。カシュガル(ホータン)写本の葉番号を見ると、この数字の書体は、写本の本文の書体と同じものではない。またこの数字の後半の部分は確かに「8」である。しかしこの数字の前半の部分が「100」を示す形であるとするには無理がある。それは、この文字を見ると、写本の葉番号に使われている文字とは全く別の書体で書かれているからである。さらに重要なことは、この数字が予想された“a”ではなく、むしろ“kha”から作られているということである。以上のことから、「[800]ではなく」[8000]のようなもっと大きな数である可能性が高い²⁹⁾。

次に、この数が何を意味しているのか解明するのは困難である。「800」と読んだとして、相当なズレを許容しても、この数字に相当する時代があるようにも思えない。「800」のような、区切りの良い数は、いずれにしる疑わしい。たまたまテキストの長さが奥書で言及されている事例を見ることがある。たとえばマハーヴァストゥ[の奥書]に「この書は、25,000 シュローカに及ぶ」(*granthapramāṇaṃ śloka 25000*)とある。25,000 シュローカは、文字数にすると800,000字(akṣaras)に相当する。カシュガル(ホータン)写本を、458葉、916頁、7行本、1行約30字として、1頁あたり210字、1葉あたり約420字

という概算となる。このことからカシュガル（ホータン）写本の文字数の総計は192,360、シュローカの数は6,011となる。これらの数は概数としても「800」や「8000」という数に一致することはない。第140葉にある第5章の奥書「最初の4分の1が終わる」(*prathamacaturbhāgaḥ samāptaḥ*)という記述と、第360葉にある第19章の末尾の「4分の3が終わる」(*trītyās caturbhāgaḥ samāpta*)という記述で、事情はいつそう複雑になってくる（下記参照）。このことから「8000」という数字が、最後の4分の1のテキストのことを言っているのではないか、という考えを完全に否定することもできない。しかし、終わりの4分の1は97葉で、文字数は40,740、シュローカ数は1,273である。最後に考えられることは、タイ北部のさらに後代のパーリ語写本に、まれにしか例がないのであるが、書写の報酬金額がここに記されているのではないか、という推測がある³⁰。結局は、よく分からないということである。

2本のダンダ（縦線）の後、奥書の正書体で書かれた部分は「Saddharmapu〔に敬礼し奉る〕」で切れている。この部分からホータン語で書かれたテキストが始まる〔のであるが、文字が正書体から〕筆記体になる箇所は破損し、失われている。H・W・ベイリーによる残存する箇所の翻訳は以下のとおりである。

「…」私は母、そしてすでに他界した父と〔功德を〕分かち合う。また夫のジャラ〔プニヤ (Jala [puṇya] とも分かち合い、…と…分かち合い、そして次に) 私は功德をパルシャジャ+(1字欠け) (Pharṣaja+) と〔すでに〕他〔界した〕ジャラウクリナ (Jaraukulina) と…分かち合い、そして次に、すでに他界した私の兄ブランガラカ (Bramgalaka) と分かち合う。また私は、分〔か…〕そして次に、すでに他〔界した〕姉 (または妹) のサンドウシュター (Samduṣṭā) (サンスクリット語でサントウシュター Saṃtuṣṭā) と分かち合う。私はすでに他界した…娘のジャロットタマー (Jalottamā) と (すでに) 他界 (した) 娘のシクシャマーニー (Śikṣamāṇī) …ブツダサンガ (Buddhasaṃgha) とヴィナヤ (Vinaya) と息子の嫁のジャラールジュニャーニー (Jalārjuṇānī) 「…兄 (または弟)」のダッタカ (Dattaka) とヴィクラマ (Vikrama) と姉 (または妹) のダルマカー (Dharmakā) と姉 (または妹) 「…そして次に」私は〔この功德をすべての友〕人、家中のすべての者、そしてすべての親族と分かち合う。」

この訳文に重大な問題は見いだせない。ただ、*pharṣaja+na* だけが、はっきりしない。H・W・ベイラーは、この複合語を「判定者 Ja+ (以下欠)」(“judge Ja+”) と解釈するが、[Ja+ (以下欠) では] あまりに短いので、人名と解釈するのは困難である。したがって、Pharṣaja+ は 1 語であり、1 つの名前を表すものと解釈する方がよいであろう³¹⁾。

全体の文脈は、奥書特有の決った言い方が反復されているので、極めて明快である。奥書の最後の部分は、碑文の例と比較してみると、インドの様式に従っているように思われる。律師ダンマセーナ (*vinayadhara Dhammasena*) の碑文では *evaṃ ca savehi nāti-mitra-baṃdhavehi* となっている。そしてタキシラの碑文では *nāti-mitra-salohidaṇa* となっている³²⁾。対応する点は次のとおり。*hayūna*「友」(*mitra*, cf. Saṃghātasūtra § 246,4 *ha [yūna] = sakhāyā*)³³⁾, *bisvāra / busvāra*「親族」(おそらく *bāndhava*) および *ysani*「親族」(*nāti*, cf. Saṃghātasūtra § 243 verse 30 *ysāne = jñātaṃ*; *ysani* は *bandhujana* とも解釈できる)³⁴⁾。

筆頭に施主である〔破損のため〕名前不明の夫人がいる。これに続く冒頭部分に多くの物故者への言及がある。そして、共に功德を分かち合う何人かの人々が並び、そこに彼女の夫の記述も見られる。現存する断簡に名前が残っているのは合計 26 人である。〔破損のため〕失われた名前が幾つあったかは不明である。少なくとも 7 人の名前が失われたと推定される。失われた人名が幾つあったか計算するのは不可能であるが、おそらく 50 人を超えることは確かであろう。

本来の葉のサイズは 57 cm × 18 cm だが、奥書をとどめたこの葉の右の残存部分のサイズは 21 cm × 13 cm で、大まかに言えば、テキストの半分しか残っていないことになる。断簡の下の部分の余白が残っているので、一番下の行は失われていないと言える。このことから、葉の上部の 5 cm 程が失われてしまったことが分かる。断簡のテキストの〔上部の〕欠落部分は、正書体にして 2 行分で (大体 60 字)、法華経本文の最後の部分と短い奥書〔の半分〕が、かつては存在していた、ということになる。円形の花文様の左右にテキストの文字が同じ長さで書かれていたとすれば、現存する奥書の前の部分から正書体の 14 文字が失われたことになる。テキストの 3 行目は破損して *saddharmapu[ṇḍarīkasūtra]* あるいは *saddharmapu[ṇḍarī]* となっており、末尾の 6 字、7 cm 分が失われている。

最後の葉を飾る円形の花文様の半径は 7 cm、円の外周から葉の〔横の〕余白までの距離は 17 cm である。このことから、この葉の横幅の半分の長さは 24 cm、

左右を足した長さは48cmということになる。本来のサイズが57cmの葉なので、この断簡の両端、約4.5cmが失われたことになる。奥書のホータン語の部分の[円形の花文様で]短くなった行には約20字が残存し、4字(～4cm)が欠損している。円形の花文様にスペースをとられ、5行にわたって文字数が少なくなっているが、[破損がなければ、1行につき]48字分書けたであろう。花文様の下の3行は、[1行につき]ほぼ60字書けたと推定される。これらのことから、テキストのかなりの部分が失われ、合計すると、奥書全体の420字のうち $120 + 90 = 210$ 字が失われているということになる。奉納に参加した人の数を推計できないのは、このためである。

名前が読み取れる人物は次のとおりである。(訳注：†は故人)

0. 名前不詳、筆頭施主
1. ジャラブニャーナーの母†
2. ジャラブニャーナーの父†
3. 夫ジャラブニャ
4. 名前欠落(単数または複数)
5. パルシャジャ+ (はっきりしない)(†?)
6. ジャラウクリナ†
7. 名前欠落(単数または複数)
8. 兄(または弟)ブランガラカ†
9. 名前欠落(単数または複数)
10. 姉(または妹)サントウシュター†
11. 名前欠落(単数または複数)
12. 娘ジャローッタマー
13. シクシャマーニー†
14. 名前欠落(単数または複数)
15. ブッダサンガ
16. ヴィナヤ
17. 息子の嫁(義理の娘)ジャラールジュニャーニー
18. 名前欠落(単数または複数)
19. 兄(または弟)ダッタカ

20. 兄（または弟） ヴイクラマ
21. 姉（または妹） ダルマカー
22. 名前欠落（単数または複数）
23. 友人たち (*mitra*)
24. 家中の者たち (*bāndhava*)
25. 親族 (*jñāti*)

この奥書を見るかぎり、名前不詳の夫人が施主の筆頭であり、その後には夫のジャラプニヤと故人となった彼女の両親が続き、この功德を施す奉納に名を連ねている。彼女の兄（または弟）はプランガラカと明確に記され、姉（または妹）はサントウシュターでほぼ間違いないだろう。ジャローッタマーと故人のシクシャマーニーの2人の「娘」が筆頭施主の娘なのか、それとも姪なのか、ここでははっきりしない。その他の人たちが、この写本を奉納した夫人と、どのような関係だったのか、また関係自体があったのかなかったのかについても、同様にはっきりとは分らない。この点を明確にするために、各章の末尾にある奥書の子細に検討してみる必要がある。またこのような作業は有益でもある。ほとんどの場合、この写本の各章の末尾には、以下のように正書体で書かれた奥書が残っている。

導入部の〔法華〕讃頌の末尾 (4b4):

Saddharmapuṇḍarikamahāyānasūtrarājasūtraṃ kṛtir³⁵ ācārya-**Rahulabhadrrasya**

導入部の最後 (6b2-4):

namaḥ sarvajñāya nama āryasamantabhadrāya bodhisatvāya mahāsatvāya. ayaṃ **deyadharmam dānapati Jalapuñsya**. siddham namaḥ sarvabuddhabodhisatvebhyaḥ. evaṃ mayā śrutaṃ ... (ここから法華経の本文が始まる)

各章の末尾の奥書:

第1章 (36a1):

... samāptaḥ. ayaṃ **deyadharmam dānapati Jalapuñsya**

第2章 (64a6f.):

.... samāptaḥ 2 || miṣjei' **jalapuñāṃna** parstā pīḍi saha **jalārrjunasya**

第3章 (101b5f.):

... samāpta 3 || deyadharmo yaṃ dānapati **Suviprabhasya**

第 4 章 (121a5):

... samāptaḥ 4 deyadharmau yaṃ **jalottamasya**

第 5 章 (140a6):

... samāptaḥ 5 || *prathamacaturbhāgaḥ samāptaḥ* || - ttū namau saddharmapuṇḍarī mijṣei'
jalapuñāna parstā pīḍi. haṃtsa pūri **śparadattina**

章末に施主の名が記されていないのは、第 6 章 (150a5, 14 字分空き); 第 7 章 (189b4, 15 字分空き); 第 8 章 (203a7, 7 字分空き); 第 9 章 (211a7, 6 字分空き); 第 10 章 (226a6, 27 字分空き); 第 11 章 (246a4, 空白なし): ... śastaḥ samāptaḥ || 6 || bhūtaprvaṃ ... etc.

第 12 章 (255b7):

... samā] pta. [1]2 deya[dharmo yaṃ]

H・戸田はここに [saha duhitā jalotama]sya と補っているが、写真版では確認できない。人物の名前は失われている。

第 13 章 (262b7):

... trayodaśama samāptaḥ 13 || atha khalu ... (施主への言及はない)

第 14 章 (283a2):

... caturdaśamaḥ samāptaḥ || [de]yadharmau yaṃ **suviprab(!)asya** saha duhitā
jalotamasya

第 15 章 (302a7-302b2):

... pañcadaśamaḥ samāptaḥ 15 || mijṣei' **jalapuñāna** parstā pīḍi uysānye jsīñi paderāṣci kiḍina. haṃtsa kṣā'dai **jalapuñāna** u pūri **jalārrjāṃna** dvīrā **jalotamā** jsa u pūrā **śparadatāna** u **dūvakā** jsa

第 16 章 (311b7): (章末が失われている)

第 17 章 (331a1):

saptāda[śamaḥ kṣā']d[ai] **jalapuñāna**

第 18 章 (340b3):

... aṣṭādaśamaḥ samāptaḥ deyadharma **suviprabhasya** saha putrā **jalārrjunasya**

第 19 章 (360b3):

... ekonaviṅśatimas samāptaḥ 19 *trītyaś caturbhāgaḥ samāpta* || ayaṃ deyadharma
suviprabhasya

第 20 章 (371b6):

奥書のテキストは失われている。

第 21 章 (380b2):

... samāptaḥ 21 deyadharmo yaṃ dānapati **jalapuñasya** saha putrā **jalārrjunasya**

第 22 章 (387a7):

ja]lapuñasya saha suvipra[bha...]

第 23 章 (407b1):

] 23 deyadharmo **suviprabhasya** [atha khalu ...

おそらくこの奥書 [のあとの部分] は [どこかに] 現存しているのであろう。

第 24 章 (421a1):

caturviṅśa]timaḥ samāptaḥ 24 deyadharmo yaṃ [約 17 字欠]sya atha khalu ...

欠けた部分の長さから推定すると、この奥書は第 2 章の奥書と対応する。

第 25 章 (432b1f.):

... pañcaviṃśatimaḥ samāpta. **jalapuñasya** [

第 26 章 (445a4):

]samāptaḥ deya[

第 27 章 (455b7):

... saptaviṃśatimaḥ samāptaḥ || atha khalu ... (施主への言及はない)

第 28 章 (459a6):

]sadevagandharvamānuṣāsūrās ca (ここで行末)

(459a7): 欠損 (約 30 字)

(459b1): 欠損 (約 30 字)

(459b2): 欠損 (約 30 字)

(459b3): + + + + + + + + + +] 800 || ttu namo saddharmapu[ṇḍarīkasūtra

(459b4): /1/]meri jsa haṃbrīhyā u pyarāna cu parilo tsuāmdā u kṣadai jala

(459b5): /2/ [puñina jsa haṃbrīhyā u ... jsa haṃbrīhyā u tti ru] puña pharṣaja+(na)
haṃbrīhyā u jaraukulina cu pari

(459b6): /3/ [lo tsue u ...] jsa u tti ru puña hīvī brātarā braṃgalaina cu parilo tsue u
ha[m]

(459b7): /4/ [...] u tti ru puña haṃtsa hvārakā saṃduṣṭi jsa haṃbrīhyā cu pa

(459b8): /5/ [rilo tsue ...] haṃbrīhyā u dvīrā jalottamā jsa u dvīrā śikṣamāñā cu parilo

(459b9): /6/ [tsue ...] budasaṃgāna u haṃtsa vinayā jsa u <haṃ>tsa pūrā nerā
jalārrjunāṃñā jsa

(459b10): /7/ [... brā](ta)rā dattakāna u haṃtsa brātarā vikraṃna u hvārakā
dhaṃrmakā jsa u hvā

(459b11): /8/ [rakā ... u tti ru puṇa biśyau hayū]nyau jsa u biśyau busvāryau jsa
haṃbrīhyā u biśyau ysanyau jsa.

28 章のすべてに章末の奥書があるわけではない。また幾つかの奥書は部分的に損傷していたり、完全に失われていたりする。結局、28 章のうち 18 章の奥書が現存しているのである。すべての奥書は、写本の本文を書いた際に添書されたものである。本文を書いたのと同じ書写生が書き入れたものであり、空白を残しておいて、そこに後から奥書を書き加えたものではない。

最初の 4 分の 1 (prathamacaturbhāga) に相当する第 1 章から第 5 章までには、すべて奥書が書かれているが、第 6 章から第 11 章には奥書が無い。第 5 章の奥書の後、[第 6 章から] 最初に奥書のある第 12 章までが、実際のところ、2 番目の 4 分の 1 (dvitīyacaturbhāga) に相当するのかも知れない。すでに指摘したが、注目すべき点として、第 6 章から第 10 章までの章末には名前を記するための余白が設けてある。余白の長さは長短さまざまである。たとえば第 25 章のように [施主の] 名前の属格の形が収まるような 6 字程度の長さから、第 5 章の章末のように長めの奥書を挿入できるような 27 字程の余白もある。大部分が破損している第 12 章の奥書には、2 番目の 4 分の 1 が終わる旨を記していたに違いない。おそらく、2 番目の 4 分の 1 のテキストは一括して複数の人たちが奉納し、第 12 章の最後にこの人たちの名前をまとめて記したのであろう。この仮説が正しければ、3 番目の 4 分の 1 (trītiya caturbhāga) は、第 13 章から第 19 章まで、4 番目の 4 分の 1 (caturthacaturbhāga) は、第 20 章から第 28 章までとなり、それぞれの 4 分の 1 に収まる章と葉の配分は、均等にならない。内訳は以下のとおりである。第 1 の 4 分の 1 : 計 5 章 (folios 7-140 = 133 葉)、第 2 の 4 分の 1 : 計 7 章 (folios 141-255 = 114 葉)、第 3 の 4 分の 1 : 計 7 章 (folios 256-360 = 96 葉)、第 4 の 4 分の 1 : 計 9 章 (folios 361-458 = 97 葉)。

テキスト全体を 4 つに分割した例は、これ以外に無いわけではないが、まれである³⁶⁾。また奉納者と関係のある人物の名前が付け加えられ、相互の人間関

係も書かれている。R・E・エメリックは、これらの名前について念入りの検証を行ったが、すべての奥書を対象にしたものではなかった³⁷⁾。

奥書に書かれた言語は、ホータン語とサンスクリット語が混淆したもので、決まった表現が繰り返される。しばしば文法の無視が見られる。特に女性の名前に男性名詞語尾を付す事例である。そのため、奉納者として名前が記されている人たちの関係が判りにくくなっている。文法だけを頼りに読んでいくと、ジャラブニャ (Jalapuña) とスヴィプラバ (Suviprabha) という2人の男性が存在するようで、夫 (ホータン語で *kṣā'dai*) であるジャラブニャには、夫人 (ホータン語で *mijṣei'*) のジャラブニャナー (Jalapuñānā) との間に、3人の子供がいる。2人は息子 (ホータン語で *pūra*, サンスクリット語で *putra*) で、ジャラルジュナ (Jalārjuna) とシュパラダッタ (Śparadatta) といい、娘 (ホータン語で *dvīra*, サンスクリット語で *duhitā*) は、ジャロットマー (Jalottamā) という。奇妙なことに、スヴィプラバにも、ジャラルジュナという息子が1人と、ジャロットマーという娘が1人いる。このような偶然は、ほとんど起こりえないのではないか。

R・E・エメリックは、この問題を解決しようとして、ジャラブニャナーの夫がジャラブニャとスヴィプラバという2つの名前を持っていたのではないかと推測した。ジャラブニャナー (Jalapuñānā) は、ジャラブニャ (Jalapuña) に接尾辞 (-ānā) を付加した派生語である。これは帰属・派生関係 (affiliation)³⁸⁾ を表す語の造語法である。[ホータン語の接尾辞 -ānā は] サンスクリット語の接尾辞 (-āna / -ānī) に相当する。一例を挙げれば、ヴェーダ時代からある、インドラ (Indra) からその妻インドラニ (Indrānī) という派生語を造るようなものである。この場合、ホータン語の接尾辞 -ānā は、夫ジャラブニャ (Jalapuña) と妻ジャラブニャナー (Jalapuñānā) が、1組の夫婦であることを示している。また、R・E・エメリックによれば、第15章の奥書の *kṣā'dai Jalapuñina* 「夫ジャラブニャによって」という明白な記述から、Jalapuña (男性名詞) は夫の名前であり、妻の名前はホータン語のジャラブニャナー (Jalapuñānā) であるという。しかし、R・E・エメリックはまた、サンスクリット語では、妻の名前はジャラブニャー (女性名詞, Jalapunya) になると考える。その理由として、第22章の奥書 *jalapuñasya saha suvipra* をあげ、その意味を「スヴィプラバ (男性名詞) とともにあるジャラブニャー (女性名詞)」と解する。

その上で、この部分が、ジャラブニャ (Jalapuña, 男性名詞) とスヴィプラバ (Suviprabha, 男性名詞) が、ジャラブニャー (Jalapuñā) の夫である人物の2つの名前を指していると考えられる。しかし、このような説、および1人の人物が2つの名前を持つというようなことは、尋常のことでないし、またほぼ不可能なことである。

この問題を解決するのは比較的簡単である。2つの名前 で言及された人物は、夫ではなく妻の方で、ホータン語では、ジャラブニャーナー (Jalapuñānā) 「(妻として) Jalapuña に属する人」と呼ばれ、サンスクリット語ではスヴィプラバー (Suviprabhā, 女性名詞) という名前になる。第14章と第22章の奥書には、*suviprab(h)asya* と男性名詞の活用語尾を付けた形になっているため、彼女が女性であることが分からなくなっている。このことは、同じ第14章の *duhitā jalotamasya* 「娘ジャロットタマーの」でも言える。明らかに女性の名前であるのに、男性の活用語尾が付いている。この問題は、表現が固定された奉納の決まり文句 (*deyadharmā formula*) が原因となって発生したのである。この形式の下では、男性名詞の活用語尾 *-asya* が堅く保持されているので、女性名詞であろうと何であろうと性に関係なく、この語尾が付けられたのである³⁹⁾。

上記の問題が解決したので、テキスト最後尾の奥書を考察したい。失われた冒頭部分に、筆頭奉納者の名が記されていた。上記までの考察により、失われたテキストは、次のような一節で始まっていたと考えられる。[*miṣjei' jalapuñāna (or: suviprabha) parstā pīḍi. puña haṁṭsa*] *meri jsa haṁbrīhyā u pyarāna cu parilo tsuāṁdā* 「ジャラブニャーナー (または: スヴィプラバー) 夫人が (このテキストを) 書かせた。私は、この功德を、すでに他界した私の母および父とともに分かち合う…」

第15章の奥書には、この家族の名が一括して記されている。「ジャラブニャーナー夫人は、彼女自身の人生を平穏ならしめるために、(第15章の) 書写を依頼した。夫ジャラブニャ、息子ジャラールジャーム (Jalārjām)、娘ジャロットタマ (Jalotama)、息子シュパラダタ (Śparadata) (“postscript” p. 388 を参照)、さらに (娘) ドウヴァーケ (Duvākā) も名を連ねる (R. E. Emmerick, p. 384)。」また、この奥書では寄進の目的が強調されている⁴⁰⁾。

上記のことから、ジャラブニャ (Jalapuṇya) とジャラブニャーニー (Jalapuṇyānī) すなわちスヴィプラバー (Suviprabhā) の夫妻には、2人の息子

たち、ジャラルジュナ (Jalārjuna)、シュパーラダッタ (Śpāradatta) と、当時存命であった2人の娘、ジャローッタマー (Jalottamā) とドゥヴァーカー (Duvākī) がいた。すでに故人となっていた3人目の娘、シクシャマーニー (Śikṣamānī) は、最後の奥書でのみ言及されている。

最後の奥書には、名前不明のスヴィプラバーの両親、彼女の夫、そして生存している娘の1人、ジャローッタマーへの言及がある。他の家族の名前もほぼ間違いなく、書かれていたのであろうが、今は失われている。さて、もう1人の娘シクシャマーニーの名が、スヴィプラバー/ジャラプニャナーの兄 (または弟)、ブランガラカ (Bhramgalaka) と、姉 (または妹)、サンストウシュター (Santustā) の名とともに書かれている。この3人は故人であるから、寄進という功德を施す行為に間接的にしか参加することができない。このような理由で、最後の奥書にのみ記載されたのであろうし、この位置が功德を回向する場所なのであろう⁴¹⁾。

最後の奥書から分かるもう1つの事実は、スヴィプラバー/ジャラプニャナーの息子、ジャラルジュナが既婚者ということであり、また彼の妻は夫の名にちなんでジャラルジュニャナー (Jalārjuṅānī) という名であるということである。残る7人、パルシャジャ (+ (?), ジャラウクリナ、ブツダサンガ、ヴィナヤ、ダツタカ、ヴィクラマ、そしてダルマカーと、ジャラプニャとスヴィプラバー/ジャラプニャナーの一家との関係は——もしあるとしても——はっきりしない。また彼ら7人の間の関係についても、よく分からない。

この奥書にある幾つかの、いかにも仏教徒らしい名前は注目に値する。シクシャマーニー⁴²⁾、ブツダサンガ、ヴィナヤ、ダルマカーである。これは律師ダナムセーナ (vinayadhara Dhammasena) の碑文にある、ボーダー (Bodhā) とブツダー (Buddhā) という2人の婦人の名前を思い起こさせる⁴³⁾。このような形の名前は、仏教文献には出てこないようであるが、かなり人気があった名前のようなものである。もちろん、仏教文献の影響によって、日常生活のなかで仏教的な人名が、必然的に使われるようになるというものでもない。

筆頭寄進者としてのジャラプニャ (Jalapuṅya) とスヴィプラバー/ジャラプニャナーの夫妻は、ダーナパティ (施主, *dānapati*) という称号が冠され、際立っている。[ダーナパティという] この称号がジャラプニャの名に冠されているのは、本文の冒頭部分 [の序偈の終わり] と、第1章と第21章の末尾の計3

回である。彼の妻の名にこの称号が冠されているのは、第3章の末尾の1回である。これらのことを勘案しても、スヴィプラバー/ジャラブニャーニー夫人が筆頭施主であったように思われる。それは、[文の内容から見て]彼女の名が、本文最後の長い奥書の冒頭にあったであろうことは、大前提として首肯できるからである。

またジャラブニャの名は、[別の]2枚の葉に *Saddharmapuṇḍarīkāsūtra* という経題とともに書写されている⁴⁴⁾。これらの2葉は、R・E・エメリックによれば、本来はカシュガル(ホータン)写本の一部であったものが散逸したものだという。テキストの先頭が *siddham*(「成就」を意味する吉祥シンボル)で始まるから、これらの2葉に葉番号は残っていないが、もともとはテキストの冒頭にあったものであろう。ここでジャラブニャは、未来仏たる弥勒が地上に出現するとき、両親や妻(その名はこの部分では記されていない)とともに再び生まれて来たいとの願いを表明している。また、彼は仏を讃嘆し、また仏が一切衆生のために行った、さまざまな無私の振る舞いを讃えている。その中の一節に「彼(仏)は身の皮を剥ぎ、骨をもって書を作った。彼は筆を与えた…(それ)で一偈(*śloka*)を書いた」(R・E・エメリック)。これは『ザンバスタの書』XXIII 16⁴⁵⁾と極めてよく似ている。同書のこの部分では、よく知られ、しばしば引用される、自らの血で仏経の一偈を書くという自己犠牲の説話が語られている。したがって、欠落した箇所は *hūni jsa*(血で)と補うべきである。訳は次のようになる。「彼は筆を与えた。彼は(自分の)血で一偈を書いた。」⁴⁶⁾

奉納に参加した人の総計は——おそらく50人ほど——大家族で、裕福な一族——書写の費用はかなり高額であった⁴⁷⁾——このことは、多くの法華経写本がホータン地方で発見されている事実とともに、法華経のサンスクリット語写本が彼の地で深く尊崇されていた⁴⁸⁾ことを裏付ける。このことはまた、イントゥラ(Intula)というホータン人が奉納した、ある写本の3つの細密画からも確認できる。この写本は、サンクトペテルブルクの(東洋古文書研究所の)コレクションとして所蔵されている。SI P 11-1, folio 240a(または206a)(plate 963)にある第5章「菓草喩品」の章末と、folio [2] 46b(plate 968)にある第6章「授記品」の章末と、そして、[plate 963と]同じ写本の断片SI P 7(plate 804)にある第7章「化城喩品」の章末(葉番号欠落)に、それぞれ細密画が描かれている⁴⁹⁾。このホータン人の奉納者の名前が、これら3つの章末に記されている。

ここで興味深いのは、[240a (または 206a) の細密画が] 最初の 4 分の 1 と第 2 の 4 分の 1 を区切るところにあるという点である。

... pañcamah samāptah || 5 || prathamaś caturbhāgaḥ || intulasya || atha khalu ...

さらには folio 240a (または 206a) (plate 963) の下の余白に、筆記体の小さな文字で書かれた判読困難な箇所を含んだ次のような奥書がある。 *ttū parivartā intulā parste pīdā* 「イントウラがこの章を書写するよう依頼した」と。 [2] 46b (146?b) (plate 968) には、 *ttū [parivartā] i [ntu] lā par [stā] (p)ī(d)ā || ++++++ + (stene) ca paraloke [ca]* 「イントウラがこの章を書写するよう依頼した…そして遠き世において」とあり、また、断片 SI P 7 (plate 804) の下の余白には [同趣旨で] *intulā parstā pīdā* とある。

カシュガル (ホータン) 写本が、後で細密画を描き入れるような体裁になっているのは興味深い。というのも、法華経の本文が始まる folio 6b と、現存する章末のすべてに、絵を描き込めるような円形の空白があるからである。そうだととしても、また細密画を描く計画があったとしても、さらにまた、このような寄進が、本文末尾の奥書に記されているように、功德を積む行為の最終段階であるという事実をもってしても、なぜ描かれないままになったのであろうか。奉納者が、絵の描き込みを依頼し、(その代金も支払う) と決めたときのために、準備的措置として細密画を描き込めるようにしておいたと考えることもできる。仮にそうでなくても、このような円形の空白は、章末を示すための明確な区切りとして役立つはずである。

第 6 章から 10 章までの章末の空白の意味を解明するのは、さらに困難である。これらの空白の長さは、すでに引用した *intulasya* の場合のように、名前を 1 つ入れるのがやっとといったものから、もっと長いものまで、一様ではない。すでに述べたように、[写本の] 本文の [各章末の] 奥書のすべては、写本 [の本文を書いたのと同じ] 書写生が、[本文と] 同じ正書体で書いてあるように見受けられる。本文の書写が完成した後 (しばらくしてから) 書き足した、というふうには見えない。従って、書写生が仕事を始める前の、奉納が計画された最初の段階で、それぞれの奉納者に [寄進する] 担当の部分が割り当てられたに違いない。そうだとすれば、これらの空白が残り、またそれらの長さが均一でない

ということには、ほとんど意味を見いだせないし、その理由を考えることも困難である。書写が行われている間であっても、さらなる寄進者を募り（その人が功德を共に享受し、寄進の費用も分担してもらい）たいという願望があったのか。しかし、そのような人物は出てこなかったのか、または断られたのであろうか。この点が解明されることは決してないであろう。

最後に論じたいことは、ホータン地方で疑う余地もないほど流行したにもかかわらず、法華経がホータン語に翻訳されなかった点である。これは、非常に人気のあった相融経 (Samghātasūtra) や、それに劣らず人気のあった金光明経 (Suvamabhāsottamasūtra) が、ホータン語に翻訳されたのと対照的である。ホータン語の非常に短い法華経の要約が現存していて、その写本も比較的多いという事実がある。これも当時の法華経の人気を裏付ける証左であろう⁵⁰⁾。このホータン語の要約とは別に、サンスクリット語からホータン語に訳された〔法華経の〕一偈が『ザンバスタの書』に引用されている⁵¹⁾。この一偈が、かつて全訳され、今は失われてしまったかもしれない、ホータン語訳法華経のたった1つの現存部分である可能性は、まず無いであろう。むしろ、これは『ザンバスタの書』の作者が、様々な經典の偈文とともに、この法華経の一偈を引用するために、この部分のみを自ら翻訳したものではないかと思われる⁵²⁾。

法華経と同じように、相融経はホータンとギルギットで広く読誦されていたことは明らかであるが、その状況は全く逆である。G・カネヴァスチーニ (G. Canevascini) は、相融経のホータン語写本29本の一部と見られる残片を確認したが、相融経のサンスクリット語写本で、ホータンで製作されたものは1本も見つかっていない。相融経のサンスクリット語写本の製作地に関して、確認、あるいは推定できるのは、それらの写本がギルギットかインド亜大陸の北西地域で書写されたということである。

金光明経は、ホータン語写本が20本ほどあり、また、かなりの数のサンスクリット語写本の断簡がある。ホータンの周辺で出土したものである⁵³⁾。ホータンにおいて、金光明経は、もっぱらサンスクリット語だけによる法華経の伝承と、もっぱらホータン語だけによる相融経の伝承の、中間の位置を占めている。

ホータン地方で発見された断簡と写本のすべてをもってしても、このような状況が、相融経のサンスクリット語写本、あるいは法華経ホータン語訳の残片が、不慮の事故によりホータン地方から完全に失われてしまったからであると

考えるのは、不可能ではないにしても、その可能性は極めて低い。しかし、そう考えるより、法華経はホータン語に翻訳されなかった経典の1つである可能性の方がはるかに高い⁵⁴⁾。その理由は、おそらく『ザンバスタの書』VI.4に言うごとく「ホータン人はホータン語に訳された『法』を全く尊重しない (M. Maggi)⁵⁵⁾ からなのであろう。『ザンバスタの書』の作者の言葉を信ずるとすれば、法華経を翻訳するのを躊躇したという事実は、この経典に対する最大の尊崇の念を示しているのであろう。

* 注は以下の英文を参照されたい。

Notes

- 1) Thus this Saddharmapuṇḍarīkasūtra shares the fate of many other manuscripts among them the famous Khotan (ex Gāndhāri) Dharmapada, cf. John Brough: The Gāndhāri Dharmapada edited with an introduction and commentary. London Oriental Series, Volume 7. London 1962, p. 2.
- 2) The present distribution of this manuscript over various libraries is described by Hirofumi Toda: Saddharmapuṇḍarīkasūtra. Central Asian Manuscripts. Romanized Texts, Edited With an Introduction, Tables and Indices. Tokushima 1981 (reprinted 1983) [rev.: O. v. Hinüber, Indo-Iranian Journal 28. 1985, pp. 137-139]. The number of folios preserved at different places is given in the introduction, p. XII.
- 3) An obituary by Sergej Fedorovič Ol'denburg (1863-1934): Pamjati Nikolaja Theodoroviča Petrovskago 1837-1908 appeared in Zapiski Vostočnogo Otdelenija Rossijskogo Archeologičeskogo Obščestva 20. 1910, pp. 1-8. where, most unfortunately, except for some bibliographical references no detailed information on antiquities collected by N. F. Petrovskij are given, nor is the end of his tenure at Kashgar mentioned; for the date cf. Skrine and Nightingale, Macartney at Kashgar, as below note 7, p. 134.
- 4) Actually, already August Friedrich Rudolf Hoernle (1841-1918): Manuscript Remains of Buddhist Literature Found in Eastern Turkestan. Oxford 1916 (reprinted Amsterdam 1970) [rev.: Jan Willem de Jong, Indo-Iranian Journal 14. 1972, p. 265], p. 139 suspected that the manuscript came from Khādaliq. This remark was obviously often overlooked with the exception of H. Toda: Sad-dharmapuṇḍarīkasūtra. Central Asian Manuscripts, as note 2 above, p. XI or Seishi Karashima: A Trilingual Edition of the Lotus Sutra — New edition of the Sanskrit, Tibetan and Chinese versions. Annual Report of The International Research Institute for Advanced Buddhology at Soka University for the Academic Year 2002. 6. 2003, pp. 85-182, particularly p. 86.

- 5) The year 1903 is mentioned in Akira Yuyama: *Bibliography of the Sanskrit Texts of the Saddharmapuṇḍarikasūtra*. Canberra 1970 [rev.: Jan Willem de Jong, *Indo-Iranian Journal* 15. 1973, pp. 140-144; F. Weller, *Orientalistische Literaturzeitung* 70. 1975, pp. 180 foll.; Boris L. Oguibéne, *Journal of the Royal Asiatic Society* 1974, pp. 76-78], p. 21, and, probably following A. Yuyama, in H. Bechert: *Über die Marburger Fragmente des Saddharmapuṇḍarīka*. *Nachrichten der Akademie der Wissenschaften in Göttingen, I. Philologisch-historische Klasse, Jahrgang 1972, Nr. 1* [rev.: C. Vogel, *Zeitschrift der Deutschen Morgenländischen Gesellschaft* 125. 1975, pp. 445-448; Jacques May, *Indo-Iranian Journal* 17. 1975, pp. 270-273], p. 11. — An English summary is given by H. Bechert: *Remarks on the textual history of Saddharmapuṇḍarīka*. *Indo-Asian Art and Culture (Acharya Raghu Vira Commemoration Volume) 2*. 1973, pp. 21-27.
- 6) Unfortunately, this note is not accessible to me; quoted after Margarita Iosifovna Vorob'ëva-Desjatovskaja in: *The Caves of One Thousand Buddhas. Russian Expeditions on the Silk Route, on the Occasion of 190 Years of the Asiatic Museum. Exhibition Catalogue*. St. Petersburg 2008, p. 104. — Yuriĭ Ašotovič Petrosyan: *The Collection of Oriental Manuscripts in the St. Petersburg Branch of the Institute of Oriental Studies and Its Investigation*. *Manuscripta Orientalia* Vol. 2, no. 3, 1996, pp. 27-37 contains only a very general survey without any helpful details.
- 7) After M. I. Vorob'ëva-Desjatovskaja as preceding note; cf. on Sir George Macartney: *Clarmont Percival Skrine and Pamela Nightingale: Macartney at Kashgar. New Light on British, Chinese, and Russian Activities in Sinkiang, 1890-1918*. Hong Kong and Oxford 1987 and *Lady (Catherine Borland) Macartney: An English Lady in Chinese Turkestan*. Hong Kong and Oxford 1985.
- 8) Cf. Jens-Uwe Hartmann & Klaus Wille: *Die nordturkestanischen Sanskrit-Handschriften der Sammlung Hoernle (Funde buddhistischer Sanskrit-Handschriften II)*, in: *Sanskrit-Texte aus dem buddhistischen Kanon: Neuentdeckungen und Neueditionen II*, bearbeitet von Jens-Uwe Hartmann, Klaus Wille, Claus Vogel, Günter Grönbold. *Sanskrit-Wörterbuch der buddhistischen Texte aus den Turfan-Funden, Beiheft 4*. Göttingen 1992, pp. 9-63.
- 9) H. Bechert: *Marburger Fragmente*, as note 5 above.
- 10) These fragments were considered as lost for some time, cf. H. Bechert, *Marburger Fragmente*, as note 5 above, p. 12.
- 11) Akira Yuyama & Hirofumi Toda: *The Huntington Fragment F of the Saddharmapuṇḍarikasūtra*. *Studia Philologica Buddhica. Occasional Paper Series II*. Tokyo 1977.
- 12) The history of research is traced by Bechert: *Marburger Fragmente*, as note 5 above, pp. 17-23; according to H. Toda: *Saddharmapuṇḍarikasūtra. Central Asian Manuscripts*, as note 2 above, p. XII these six fragments are preserved at Peking. This needs correction. In fact,

there are not six, but seven very fragmentary folios in the Lüshun Museum Collection. They are edited together with the remaining Saddharmapuṇḍarīkasūtra manuscripts from the materials collected by Kozui Otani (1876-1948) by JIANG Zhongxin: Sanskrit Lotus Sutra Fragments from the Lüshun Museum Collection. Facsimile Edition and Romanized Text. Lüshun and Tokyo 1997, facsimiles (“manuscript D”) pp. 174-187.

- 13) H. Lüders: Miscellaneous Fragments I. Saddharma-Puṇḍarīka, in: A. F. R. Hoernle: Manuscript Remains, as note 4 above, pp. 139-162, cf. Hoernle’s note p. 143. Lüders’ article also contains an edition of the Nepalese manuscript tradition corresponding to pp. 261,14-265,13 and pp. 269,7-271,3 in Kern-Nanjio. The relevant information was given to H. Lüders by H. Kern before the latter’s edition appeared. — On Lüders’ work on the Saddharmapuṇḍarīkasūtra cf. also Ursula Sims-Williams: The papers of the Central Asian scholar and Sanskritist Rudolf Hoernle, in: Seishi Karashima & Klaus Wille: Buddhist Manuscripts from Central Asia. The British Library Sanskrit Fragments Volume I. Tokyo 2006 [rev: R. Salomon, Journal of the American Oriental Society 128. 2008, p. 809], pp. 1-26, particularly p. 4.
- 14) Saddharmapuṇḍarīka ed. by Henrik Kern and Bunyiu Nanjio. St. Petersburg 1908-1912 (Bibliotheca Buddhica X) (reprinted Osnabrück 1970).
- 15) On the well-known shortcomings of this edition: Willy Baruch: Beiträge zum Saddharmapuṇḍarīkasūtra. Leiden 1938 [rev.: Jean Filliozat, Journal Asiatique 238, 1938, pp. 346 foll.], pp. 7-12.
- 16) H. Toda: Saddharmapuṇḍarīkasūtra. Central Asian Manuscripts, as note 2 above.
- 17) Klaus Wille: Fragments of a Manuscript of the Saddharmapuṇḍarīkasūtra from Khādaliq. Lotus Sutra Manuscript Series 3. Tokyo 2000, pp. 159-183 chapter 4.5 giving a concordance of all known Central Asian fragments with the Kashgar Manuscript. Cf. now also M. I. Vorob’eva-Desjatovskaja & Noriyuki Kudo: A Newly Identified Fragment of the *Saddharmapuṇḍarīkasūtra* kept in the St. Petersburg Branch of the Institute of Oriental Studies. ARIRIAB 10. 2007, pp. 57-66.
- 18) The origin of Lüshun manuscript C is unknown, manuscript D is the Kashgar (Khotan) manuscript, cf. Z. Jiang, Sanskrit Lotus Sutra Fragments from the Lüshun Museum Collection, as note 10 above, p. 23 foll.
- 19) According to Grigorij Maksimovič Bongard-Levin & M. I. Vorob’eva-Desjatovskaja: Pamjatniki indijskoj pis’mennosti iz Central’noj Azii. Izdanie tekstov, issledovanie i kommentarij. Vypusk 1. Pamjatniki pis’mennosti Vostoka LXXIII,1 = Bibliotheca Buddhica XXXI-II. Moscow 1985 [rev.: J. W. de Jong, Indo-Iranian Journal 30. 1987, pp. 215-221; D. Seyfort Rugg, Bulletin of the School of Oriental and African Studies 51. 1988, pp. 576-578; L. Sander, Orientalistische Literaturzeitung 84. 1989, pp. 92-97], p. 87.
- 20) H. Bechert: Marburger Fragmente, as note 5 above, p. 15.

- 21) H. Lüders: Miscellaneous Fragments I. Saddharma-Puṇḍarīka, as note 13 above, p. 161 foll.; there are more examples of this particular vocative plural form which are listed by H. Toda: Saddharmapuṇḍarīkasūtra. Central Asian Manuscripts, as note 2 above, p. XXIII § 18, cf. also O. v. Hinüber: Das ältere Mittellindisch im Überblick. Österreichische Akademie der Wissenschaften. Philosophisch-historische Klasse. Sitzungsberichte, 467. Band. Wien ²2001, § 322.
- 22) Seishi Karashima: Some Features of the Language of the Saddharmapuṇḍarīkasūtra. Indo-Iranian Journal 44. 2001, pp. 207-230.
- 23) Claus Vogel: The Dated Nepalese Manuscripts of the Saddharmapuṇḍarīkasūtra. Nachrichten der Akademie der Wissenschaften in Göttingen, I. Philologisch-historische Klasse, Jahrgang 1974, Nr. 5: nos. (3) AD 1039, (4) AD 1064 and (6) AD 1065 etc. Another old Nepalese manuscript not accessible to C. Vogel and dated to N.S. 202 (Caitra) = AD 1082 is edited by Jiang Zhongxin: A Sanskrit Manuscript of Saddharmapuṇḍarīka Kept in the Library of the Cultural Palace of the the Nationalities, Beijing. Peking 1988.
- 24) N. D. Mironov: Buddhist Miscellanea: I. Avalokiteśvara - Kuan-Yin; II. Central Asian Recensions of the Saddharmapuṇḍarīka. Journal of the Royal Asiatic Society 1927, pp. 241-252 and pp. 252-279.
- 25) R. E. Emmerick in H. Toda: Saddharmapuṇḍarīkasūtra. Central Asian Manuscripts, as note 2 above, p. XII.
- 26) Saddharma-Puṇḍarīka-Sūtra. Kashgar Manuscript (foreword by Heinz Bechert). Tokyo 1977, p. 1 foll.
- 27) Missing text is put into brackets [], damaged *akṣaras* into parentheses (), while <> marks an *akṣara* forgotten by the scribe, and + stands for gap of one *akṣara*.
- 28) The numbers from this manuscript are conveniently collected by Klaus Wille: Die handschriftliche Überlieferung des Vinayavastu der Mūlasarvāstivādin. Verzeichnis der Orientalischen Handschriften in Deutschland. Supplementband 30. Stuttgart 1990, table p. 20.
- 29) By coincidence the only numerical sign beyond “1000” noted by Georg Bühler in his palaeography is “8000” quoted from the Chammak Plates of Pravarasena II published in Vasudev Vishnu Mirashi: Inscriptions of the Vākātakas. Corpus Inscriptionum Indicarum V. Ootacamund 1963, pp. 22-27, line 19. The interpretation is certain because of the text *sahasrair aṣṭābhiḥ 8000*. High numbers noted by Louis Renou & Jean Filliozat: L’Inde classique. Manuel des études indiennes. Tome II, Hanoi 1953, pp. 705-707 look quite different. It seems that the numerical signs for “1000” etc. were created independently in different scripts.
- 30) Cf. O. v. Hinüber: Die Pāli Handschriften des Klosters Lai Hin. Wiesbaden 2013, p. XLVI-II foll., cf. note 46 below.
- 31) On *pharṣa* “judge” cf. Ela Filippone: Is the Judge a Questioning Man? Notes in the

Margin of Khotanese *pharṣavata-*, in: Iranian Languages and Texts from Iran and Turan. Ronald E. Emmerick Memorial Volume ed. by Maria Macuch, Mauro Maggi & Werner Sundermann. Iranica Band 13, Wiesbaden 2007, pp. 75-86 with older literature, but without reference to the colophon.

- 32) O. v. Hinüber: A Second Inscription from Phanigiri (Andhrapradesh): Dhammasena's Donation. ARIRIAB 15. 2012, pp. 2-10, particularly p. 4, line 7 foll. An improved edition of this inscription, particularly of lines 14-17, appeared in ARIRIAB 16. 2013, pp. 3-12. — Sten Konow: Kharoṣṭhī Inscriptions with the exception of those of Aśoka. Corpus Inscriptionum Indicarum II,1. Calcutta 1929, no. XXXV,2, p. 91.
- 33) Giotto Canevascini: The Khotanese Samghāṣūtra. A critical edition. Beiträge zur Iranistik Band 14. Wiesbaden 1993.
- 34) Cf. H. W. Bailey: Dictionary of Khotanese Saka. Cambridge 1979 s.v. *ysani*. The colophon of the Jñānolkadhāraṇī has a similar wording *harbiśyau ysanyau u busvāryau jsa haṃṣa biśyau sarvastvyau uysnauryau jsa* “zusammen mit den gesamten Ge-schlechtsangehörigen [= Blutsverwandten] und Verschwägerten, zusammen mit allen (Sak.) allen (Sansk.) Wesen (Sansk.) Wesen (Sak.)” after Ernst Leumann: Buddhistische Literatur Nordarisch und Deutsch. I. Teil: Nebenstücke. Abhandlungen für die Kunde des Morgenlandes XV.2. Leipzig 1920 (repr. Nendeln 1966), p. 164.
- 35) The name of an author is given in a corresponding way in]*ḵrtir bhikṣor ācaryaDharmatrāta*[*syā*, in: Sanskrithandschriften aus den Turfanfunden. Teil 9: Die Katalognummern 2000-3199 beschrieben von K. Wille, herausgegeben von H. Bechert. Verzeichnis der Orientalischen Handschriften in Deutschland, Band X, 9. Stuttgart 2004 [rev.: O. v. Hinüber, Indo-Iranian Journal 48. 2005, pp. 299-312], Kat.-Nr. 2026, p. 53, (provenance unknown); Gilgit Manuscript no. 8 Viśvantarāvadāna, p. 157 = no. 1347:] *samāptam ḵrtir ācārya-Śūrasya* ||, in: O. v. Hinüber: The Gilgit Manuscripts. An Ancient Buddhist Library in Modern Research (in press). The same formula also occurs in epigraphy, e.g.: *ḵrti buddhabala* at the end of the Shigar inscription, cf. O. v. Hinüber: Die Palola Śāhis. Ihre Steininschriften, Inschriften auf Bronzen, Handschriftenkolophone und Schutzzauber. Materialien zur Geschichte von Gilgit und Chilas. Antiquities of Northern Pakistan Vol. 5. Mainz 2004, p. 69.
- 36) There is no example for this kind of text division in Louis Renou: Les divisions dans les textes sanskrits. Indo-Iranian Journal 1. 1957, pp. 1-32. It does occur once again, however, in the Saddharmapuṇḍarikasūtra manuscript donated by Intula (see below).
- 37) R. E. Emmerick: Some Khotanese Donors, in: Mémorial Jean de Menasce éd, par Ph. Gignoux et A. Tafazzoli. Leuven 1974, pp. 383-388, 3 plates. Only the colophons of the Parivartas II, V, XV are discussed here.
- 38) Almuth Degener: Khotanische Suffixe. Alt- und Neu-Indische Studien 39. Stuttgart 1979

- [rev.: P. O. Skjærø, *Kratylos* 35. 1990, pp. 99-102; B. Tikkanen, *Studia Orientalia*, Helsinki 67. 1991, pp. 213-215; D. Weber, *Zeitschrift der Deutschen Morgenländischen Gesellschaft* 143. 1993, pp. 421-425; O. v. Hinüber, *Indo-Iranian Journal* 36. 1993, pp. 372 foll.], pp. 71-73 § 7.B.11-7.B.19.
- 39) Examples for the mechanical use of various case endings are collected in O. v. Hinüber: *Die Palola Śāhis*, as note above note 35, p. 145; O. v. Hinüber: *Buddhistische Inschriften aus dem Tal des Oberen Indus*, in: *Antiquities of Northern Pakistan Vol. I: Rock Inscriptions in the Indus Valley*. Mainz 1989, pp. 73-106, particularly p. 85: *bhāginyā pravāsūbena, raktaśāntenasya bhikṣoḥ, āyusmām raktaśāntenas*; O. v. Hinüber: *The Saddharmapuṇḍarīkasūtra at Gilgit: Manuscripts, Worshipers, and Artists*. *The Journal of Oriental Studies* 22. 2012, pp. 52-67, particularly p. 54: *pevothīyena*, fem.; further: *siṅhoṭesya*, *Chilās* 20:2 (*siṅhoṭena* x *siṅhoṭasya*), in: Ditte Bandini-König: *Die Felsbildstation Thalpan I, Kataloge Chilas-Brücke und Thalpan (Steine 1-30)*. *Materialien zur Archäologie der Nordgebiete Pakistans Band 6*. Mainz 2009, correspondingly *ṣerīyesya*, *Thalpan* 516:1, *virudhaena*, *Thalpan* 509:37, both in: Ditte Bandini-König: *Die Felsbildstation Thalpan IV, Katalog Thalpan (Steine 451-811)*. *MANP Band 9*. Mainz 2009 and *adharmaeṇa*, *Samghātasūtra* manuscript F § 103.3, cf. G. Canevascini, as note 33 above, p. 49.
- 40) *Devaśīrikā*, the donatrix of manuscript D of the *Samghātasūtra* expresses a similar wish: *sve śārīre āyurvalavarṇavṛddhi*, O. v. Hinüber: *Palola Śāhis*, as note 35 above, no. 10 (*Samghātasūtra*).
- 41) Another example for deceased persons being included in the act of merit making is the colophon to the Gilgit manuscript “D” of the *Samghātasūtra*, cf. preceding note.
- 42) The existence of this name does not necessarily point to the actual existence of the status of a *śikṣamāṇā* in the career of a Buddhist nun in ancient Khotan. On the absence of *śikṣamāṇās* cf. Ann Heirman: *Where is the Probationer in the Chinese Buddhist Nunneries?* *Zeitschrift der Deutschen Morgenländischen Gesellschaft* 158. 2008, pp. 105-137 and O. v. Hinüber: *The Foundation of the Bhikkhunīsamgha. A Contribution to the Earliest History of Buddhism*. *ARIRIAB* 11. 2008, pp. 3-29, particularly p. 19.
- 43) O. v. Hinüber: *A Second Inscription from Phanagiri*, as note 32 above; *Pavajitkā* is not a personal name, as assumed erroneously, cf. *ARIRIAB* 13. 2013, p. 3 foll.
- 44) These folios are published as facsimile in R. E. Emmerick & M. I. Vorob'eva-Desjatovskaja: *Saka Documents VII: the St. Petersburg Collections. Corpus Inscriptionum Iranicarum Part II Inscriptions of the Seleucid and Parthian Periods and of Eastern Iran and Central Asia*. Vol. V. Saka. London 1993 [rev.: A. Degener, *Journal of the Royal Asiatic Society* 3rd Series 5. 1995, pp. 119 foll.]; H. Kumamoto, *Indo-Iranian Journal* 38. 1995, pp. 371-376 (also on the text volume); G. Canevascini, *Bulletin of the School of Oriental and African*

Studies 59. 1996, pp. 163 foll.; M. Maggi, *Orientalistische Literaturzeitung* 92. 1997, pp. 589 foll.; R. Schmitt, *Kratylos* 42. 1997, pp. 175-177], plates 49, 50 and in transcription by R. E. Emmerick & M. I. Vorob'ëva-Desjatovskaja: *Saka Documents Text Volume III: the St. Petersburg Collections. Corpus Inscriptionum Iranicarum Part II Inscriptions of the Seleucid and Parthian Periods and of Eastern Iran and Central Asia. Vol. V. Saka. London 1995* [rev.: A. Degener, *Journal of the Royal Asiatic Society 3rd Series* 6. 1996, pp. 439 foll.]; M. Maggi, *Indo-Iranian Journal* 41. 1998, pp. 282-288; Y. Yoshida, *Bulletin of the School of Oriental and African Studies* 60. 1997, pp. 567-569; H. Kumamoto, *Orientalistische Literaturzeitung* 92. 1997, pp. 239-245], pp. 68 foll.

- 45) *The Book of Zambasta. A Khotanese poem on Buddhism*, edited and translated by R. E. Emmerick. London Oriental Series Volume 21. London 1968.
- 46) This suggestion is not without problems, because the traces of *akṣaras*, particularly the beginning of line 3 with *jsa* do not really seem to match. — A corresponding Sanskrit text is, e.g., *madīyena śoṇitena massiṃ kuryyāc carmmam utpāṭya bhūrjjaṃ kuryyād asthi bhaktvā ca kalamam kuryyāt*, Adeleid Mette: *Die Gilgitfragmente des Kāraṇḍavyūha. Indica et Tibetica* 29. Swisttal-Odendorf 1997 [rev.: H. V. Guenther, *Journal of the American Oriental Society* 120. 2000, p. 153], p. 143, 9-11 = P. L. Vaidya: *Mahāyā-nasūtrasaṃgraha, Volume I. Buddhist Sanskrit Texts* 17. Darbhanga 1961, p. 293, 22 foll.; Mātrceṭa writes his *Prāṇidhānasa-ptati* with his own blood: Jens-Uwe Hartmann: *Das Varṇārhavarnastotra des Mātrceṭa herausgegeben und übersetzt. Abhandlungender Akademie der Wissenschaften in Göttingen. Philologisch-historische Klasse. Dritte Folge Nr. 160. Sanskrittexte aus den Turfanfundstücken XII. Göttingen 1987* [rev.: J. W. de Jong, *Indo-Iranian Journal* 32. 1989, pp. 243-248; M. Hara, *Orientalistische Literaturzeitung* 86. 1991, pp. 313-318; O. v. Hinüber, *Wiener Zeitschrift für die Kunde Südasiens* 39. 1995, p. 248 foll.], p. 20 etc.
- 47) On the prices of Pāli manuscripts copied much later in 16th century Northern Thailand cf. note 30 above.
- 48) On the *Saddharmapuṇḍarīkasūtra* in Khotan: Mauro Maggi, in: R. E. Emmerick & Maria Macuch (edd.): *The Literature of Pre-Islamic Iran. Companion Volume I to A History of Persian Literature. A History of Persian Literature Vol. XVII. London 2009*, p. 324 foll.
- 49) Both miniatures are reproduced in black and white in G. M. Bongard-Levin & M. I. Vorob'ëva-Desjatovskaja: *Pamjatniki*, as note 19 above, pp. 250 and 253. The miniature on folio 240a is reproduced in colour in the exhibition catalogue *The Lotus Sutra and Its World. Buddhist Manuscripts of the Great Silk Road. Manuscripts and blockprints from the collection of the St. Petersburg Branch of the Institute of Oriental Studies. St. Petersburg & Tokyo 1998*, plate 2 = *Buddhistische Manuskripte der Seidenstraße. Das Lotussutra und seine Welt. Wien und Wolfenbüttel 2000*, plate 2.

- 50) R. E. Emmerick: A Guide to the Literature of Khotan. Second Edition, Thoroughly Revised and Enlarged. Studia Philologica Buddhica. Occasional Paper Series III. Tokyo 1992, pp. 27-29; H. W. Bailey: Sad-dharma-puṇḍarīka-sūtra. The Summary in Khotan Saka. The Australian National University. Faculty of Asian Studies. Occasional Paper 10. Canberra 1971 [rev.: M. J. Dresden, Journal of the American Oriental Society 93. 1973, pp. 599 foll.]; H. W. Bailey: The Khotanese Summary of the Sad-dharma-puṇḍarīka-sūtra, in: Taisho Daigaku Kenkyukiyo. Memoirs of the Taisho University, The Department of Literature and Buddhism. 57. 1972, pp. 530-526.
- 51) Book of Zambasta, as note 45 above, VI 3. The verse was identified already by Ernst Leumann (1859-1931).
- 52) Cf. M. Maggi, as note 48 above, pp. 338 foll.
- 53) Prods Oktor Skjærvø: The Most Excellent Shine of Gold, King of Kings of Sutras. The Khotanese Suvarṇabhāsottamasūtra. Sources of Oriental Languages and Literatures 60, 61. Central Asian Sources V, VI. Cambridge/Mass. 2004, 2 Volumes. On the Sanskrit manuscripts Vol. I, pp. XXXIII foll.; on the Khotanese manuscripts pp. LXII-LXXI.
- 54) Thus also M. Maggi, as note 48 above, p. 375. — It is remarkable that no Khotanese Vinaya text seems to exist with the only exception of the Tumšūqese Karmavācanā containing the vows of an *upāsaka* (or an *upāsikā*?): R. E. Emmerick: The Tumšūqese Karmavācanā Text. Abhandlungen der Akademie der Wissenschaften und der Literatur, Mainz. Geistes- und sozialwissenschaftliche Klasse. Jahrgang 1985, Nr. 2 [rev.: V. H. Mair, Journal of the American Oriental Society 106. 1986, pp. 879 foll.; H. Kumamoto, Kratylos 32. 1987, pp. 176 foll.; P. O. Skjærvø, Journal of the Royal Asiatic Society 1987, pp. 77-90; O. v. Hinüber, Orientalistische Literaturzeitung 83. 1988, pp. 619 foll.] with corrections by Klaus Totila Schmidt: Ein Beitrag des Tocharischen zur Entzifferung des Tumšūqsakischen. Altorientalische Forschungen 15. 1988, pp. 306-314.
- 55) This would not shed a very favourable light on the Samghātasūtra in Khotanese, unless, perhaps, both texts simply appealed to different readers and users, the Saddharmapuṇḍarīkasūtra to the educated or learned and the (to our taste at least) rather unassuming Samghātasūtra to the common monk or layman(?).

(Oskar von Hinüber / フライブルク大学名誉教授)

(訳・みずふね のりよし / 東洋哲学研究所委嘱研究員)

こつき はるあき / 東洋哲学研究所委嘱研究員)